

令和6年度食品安全モニター課題報告
「食品の安全性に関する意識等について」
(概要)

I 調査の概要

1. 調査目的

食品安全モニターを対象とする調査から、食品の安全性に係る意識等について明らかにする。

2. 調査対象

食品安全モニター454名

有効回答数 372名（有効回答率：81.9%、回答者内識別紙1参照）

※食品安全モニターとは、食品安全に関する職務経験や、食品に関する資格を有する者など一定の要件を満たすものです。

3. 調査方法

インターネットによるアンケート調査

4. 調査期間

令和7年1月27日～令和7年2月11日

5. 調査項目

<1>食品の安全性に係る危害要因等について

<2>有機フッ素化合物（PFAS）の食品健康影響評価について

<3>食品安全委員会・食品安全モニター等について

Ⅱ 結果の概要

< 1 > 食品の安全性に係る危害要因等について

(1) 日常生活を取り巻く分野別の不安の程度

7つのリスク分野（自然災害、環境問題、戦争・テロ、犯罪、重症感染症、交通事故、食品安全）について聞いたところ、「とても不安を感じる」又は「ある程度不安を感じる」と回答した者の割合は、各分野のうち、「自然災害」が93.0%と最多で、次いで「環境問題」が86.3%、「犯罪」が77.2%となり第3位になっている（図1-1）。なお、「食品安全」（62.6%）は最も低く、令和5年度の60.7%から1.9ポイント増加している。「食品安全」の不安の程度が最も低いのは10年連続である。

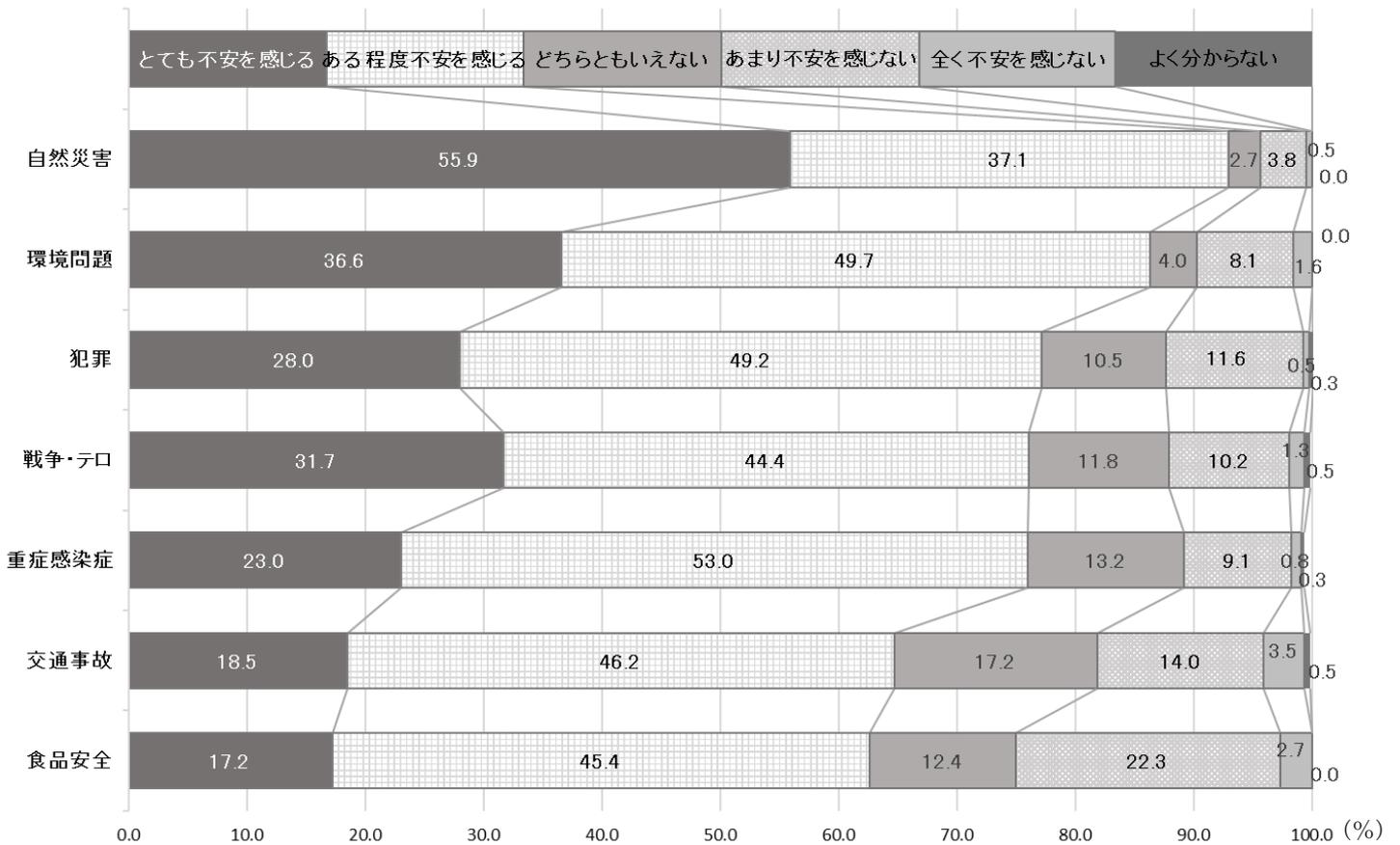


図1-1 日常生活を取り巻く分野別の不安の程度 (n=372)

※「とても不安を感じる」「ある程度不安を感じる」の合計が高い順に並べたグラフにしている。

(2) 食品の安全性の観点から感じるハザードごとの不安の程度

食品の安全性の観点から感じるハザードごとの不安について聞いたところ、「とても不安を感じる」又は「ある程度不安を感じる」と回答した者の割合は、「有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等」（81.7%）が最も高く、次いで「いわゆる健康食品」（67.2%）、「かび毒」（66.9%）の順であった（図1-2）。

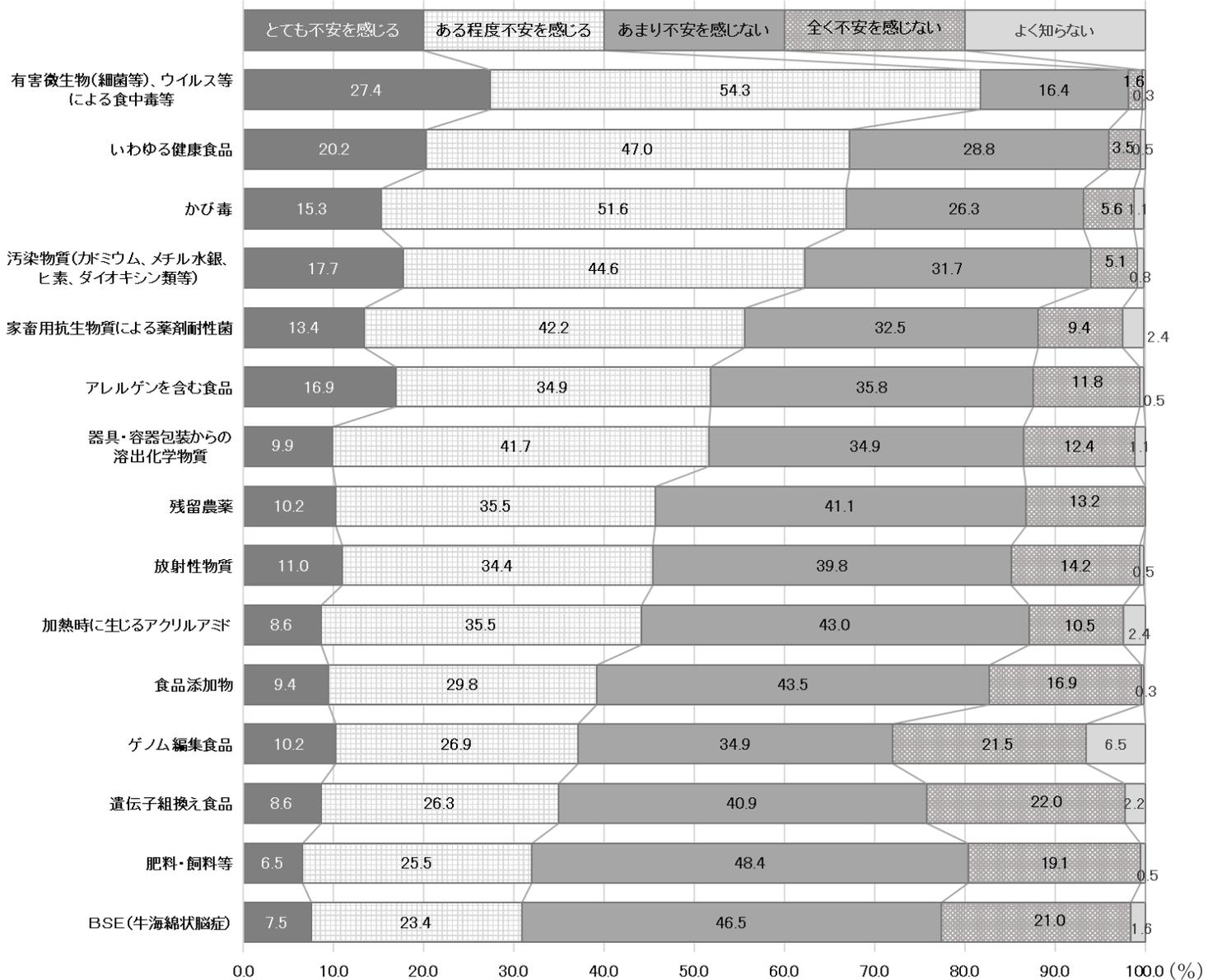


図1-2 食品の安全性の観点から感じるハザードごとの不安の程度 (n=372)

※「とても不安を感じる」「ある程度不安を感じる」の合計が高い順に並べたグラフにしている。

(3) 食品の安全性の観点から感じるハザードごとの不安の程度（年度別推移）

食品の安全性の観点から感じるハザードごとの不安の程度の年度別推移をみると、「有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等」は、平成24年以降13年連続1位である。2位の「いわゆる健康食品」は調査開始時から、3位の「かび毒」は調査項目に追加された平成28年以降60%を超えている（表1）。

表1 食品の安全性の観点から感じるハザードごとの不安の程度（年度別推移）
（「とても不安である」「ある程度不安である」の合計割合の上位7位）

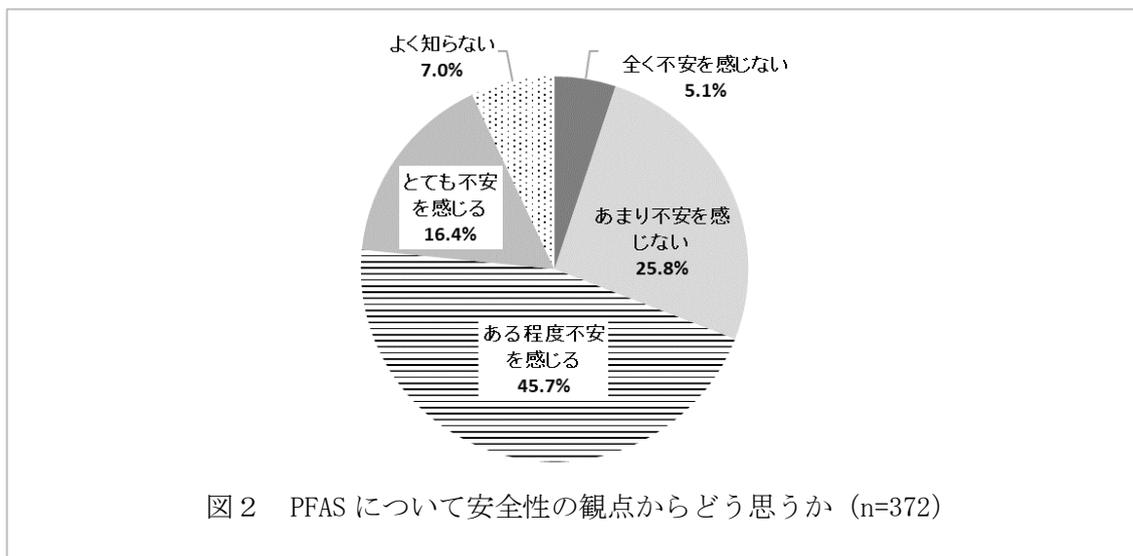
年度	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位
今回調査	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（81.7%）	いわゆる健康食品（67.2%）	かび毒（66.9%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素、ダイオキシン類等）（62.3%）	家畜用抗生物質による薬剤耐性菌（55.6%）	アレルギーを含む食品（51.8%）	器具・容器包装からの溶出化学物質（51.6%）
令和5年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（82.5%）	かび毒（65.3%）	いわゆる健康食品（63.6%）	家畜用抗生物質による薬剤耐性菌（60.3%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素、ダイオキシン類等）（59.6%）	アレルギーを含む食品（57.2%）	放射性物質（49.0%）
令和4年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（79.5%）	いわゆる健康食品（66.8%）	かび毒（65.6%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素、ダイオキシン類等）（62.1%）	家畜用抗生物質による薬剤耐性菌（59.4%）	アレルギーを含む食品（58.2%）	放射性物質（51.3%）
令和3年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（80.5%）	かび毒（64.1%）	家畜用抗生物質による薬剤耐性菌（63.9%）	いわゆる健康食品（62.9%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素、ダイオキシン類等）（61.4%）	アレルギーを含む食品（60.5%）	放射性物質（54.9%）
令和2年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（83.2%）	かび毒（72.5%）	いわゆる健康食品（60.5%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（59.4%）	家畜用抗生物質による薬剤耐性菌（57.4%）	残留農薬（56.3%）	器具・容器包装からの溶出化学物質（55.5%）
令和元年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（85.1%）	家畜用抗生物質による薬剤耐性菌（66.1%）	いわゆる健康食品（62.6%）	かび毒（61.9%）	アレルギーを含む食品（59.9%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（53.9%）	器具・容器包装からの溶出化学物質（52.8%）
平成26年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（78.5%）	放射性物質（64.1%）	いわゆる健康食品（64.1%）	残留農薬（58.8%）	家畜用抗生物質（55.4%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（53.6%）	食品添加物（50.4%）
平成21年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（79.6%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（78.1%）	残留農薬（73.1%）	家畜用抗生物質（68.2%）	器具・容器包装からの溶出化学物質（67.5%）	遺伝子組換え（64.6%）	食品添加物（62.5%）
平成16年度	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（91.7%）	残留農薬（89.7%）	家畜用抗生物質（83.5%）	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（80.9%）	食品添加物（76.4%）	遺伝子組換え（74.7%）	BSE（牛海綿状脳症）（74.5%）

※初回調査の平成16年度から令和元年度までは、5年毎に調査結果を記載

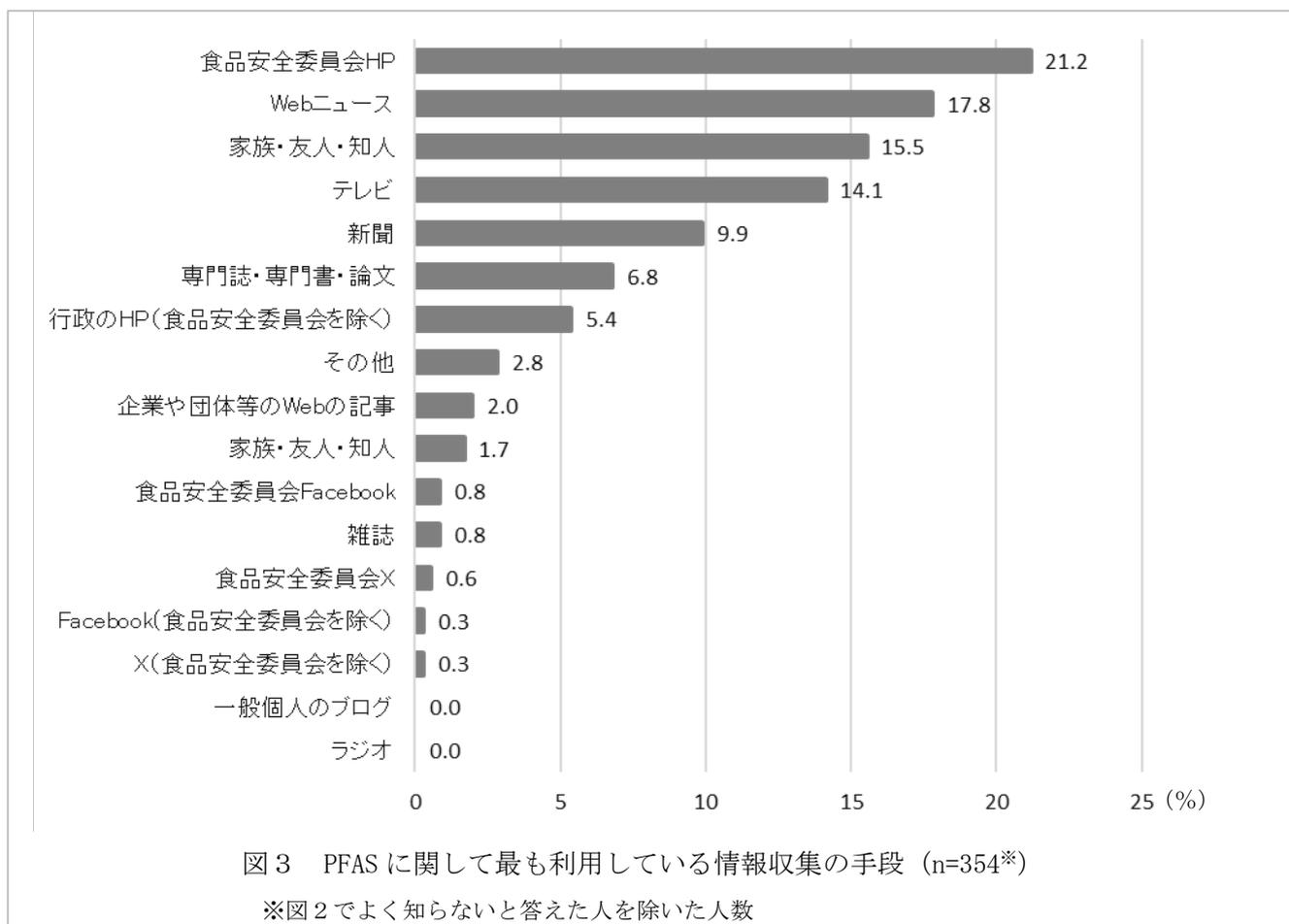
< 2 > 有機フッ素化合物（PFAS）の食品健康影響評価について

(1) 有機フッ素化合物（PFAS）の不安の程度と PFAS に関する情報収集の手段

食品の安全性の観点から PFAS の不安の程度を聞いたところ、「とても不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」者の合計割合は、62.1%であった。

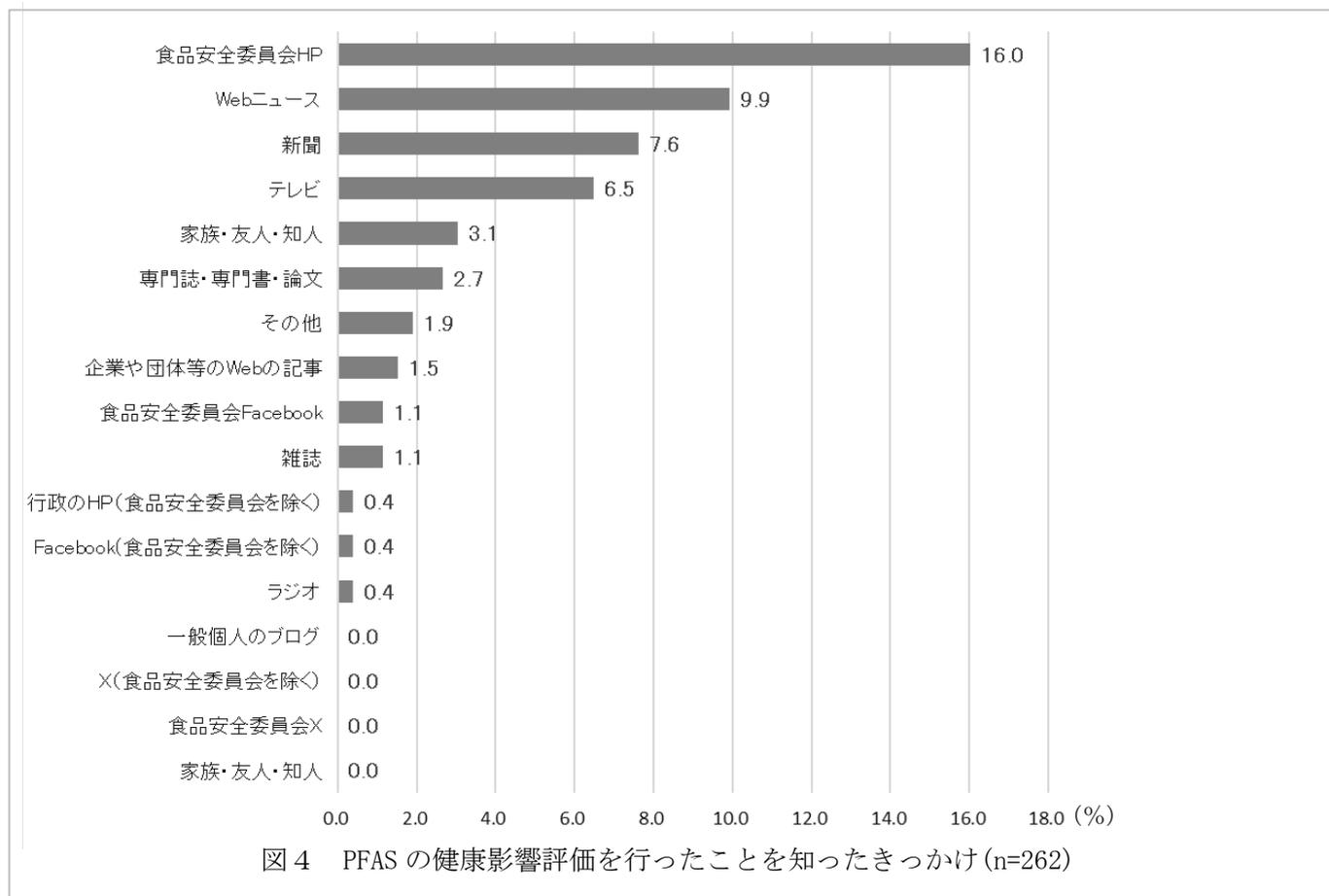


次に PFAS の不安の程度を回答した者に PFAS に関しての情報収集の手段について聞いたところ、「食品安全委員会のホームページ」が最も高く 21.2%であり、次いで「Web ニュース」が 17.8%であった（図3）。



(2) 食品安全委員会が PFAS の食品健康影響評価を行ったことの認知度ときっかけについて

食品安全委員会が PFAS について健康影響評価を行ったことをこのアンケートに答える以前から知っていたかどうかを聞いたところ、知っていた者が、70.4% (262 名) で、知らなかった者が 29.6% (110 名) であった。知ったきっかけについては、食品安全委員会のホームページからが 16.0% と高かった。



(3) 食品安全委員会が公表した PFAS の評価に関する情報の中で閲覧した資料とわかりやすさについて

PFAS に関する情報（「評価書」、「評価書に関する Q&A」、「姫野座長インタビュー」、「評価書の概要」、「食品安全オンラインセミナー動画」）についての閲覧とわかりやすさについて聞いたところ、最も閲覧された資料は、「評価書の概要」で、最も閲覧がなかった資料は、食品安全オンラインセミナー動画であった（図5）。

情報提供をしたいかどうかについては、「強く思う」が 21.8%（図6）、情報提供したい相手については、「家族・親戚」が最も高く 31.7% であった（図7）。

さらに、どのように情報提供するのかを聞いたところ、「会話の中で」46.7%、「資料の閲覧や配布」18.5%、「メール」11.9% であり、SNS の投稿やシェアの占有割合は低値であった（図8）。

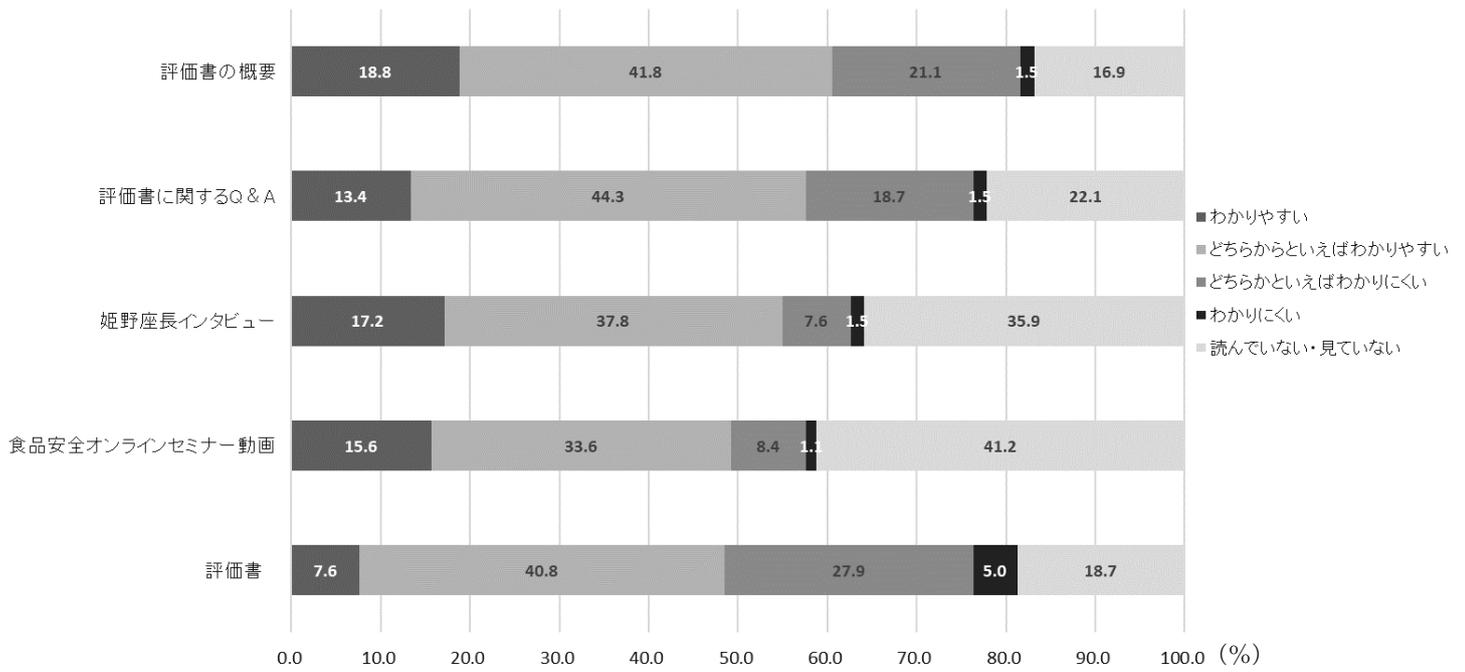


図5 PFAS の評価に関する情報の閲覧とわかりやすさ (n=262)

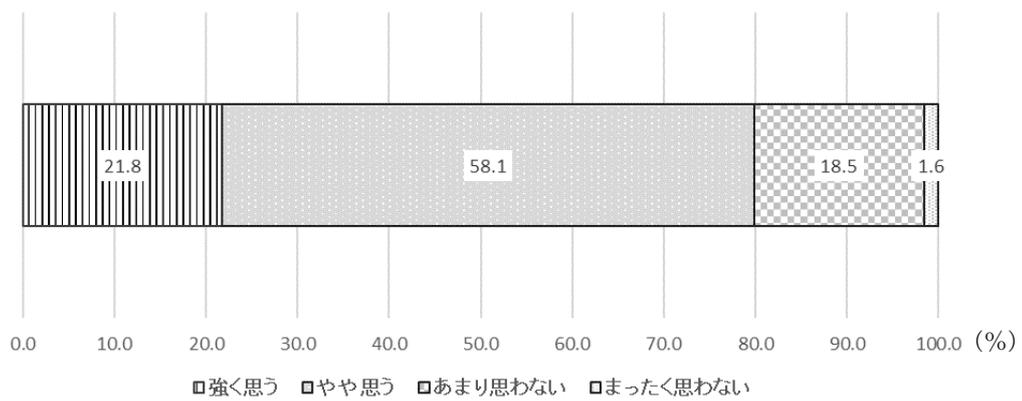


図6 PFAS の評価について周囲に情報提供したいか (n=262)

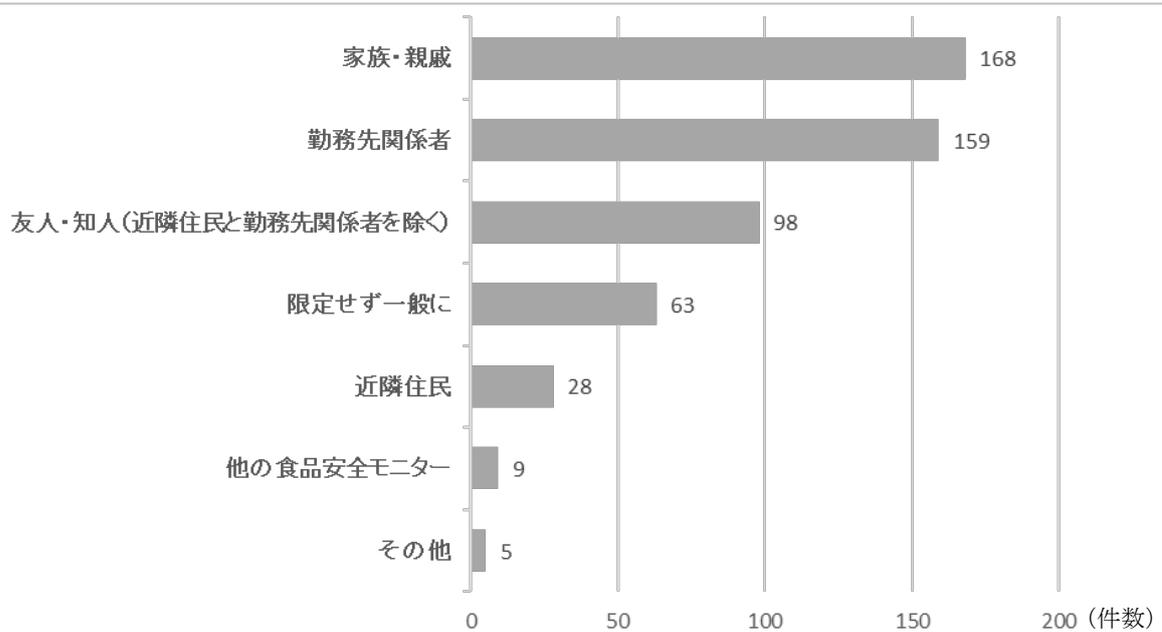


図7 PFAS の評価に関して情報提供したい相手 (複数回答)

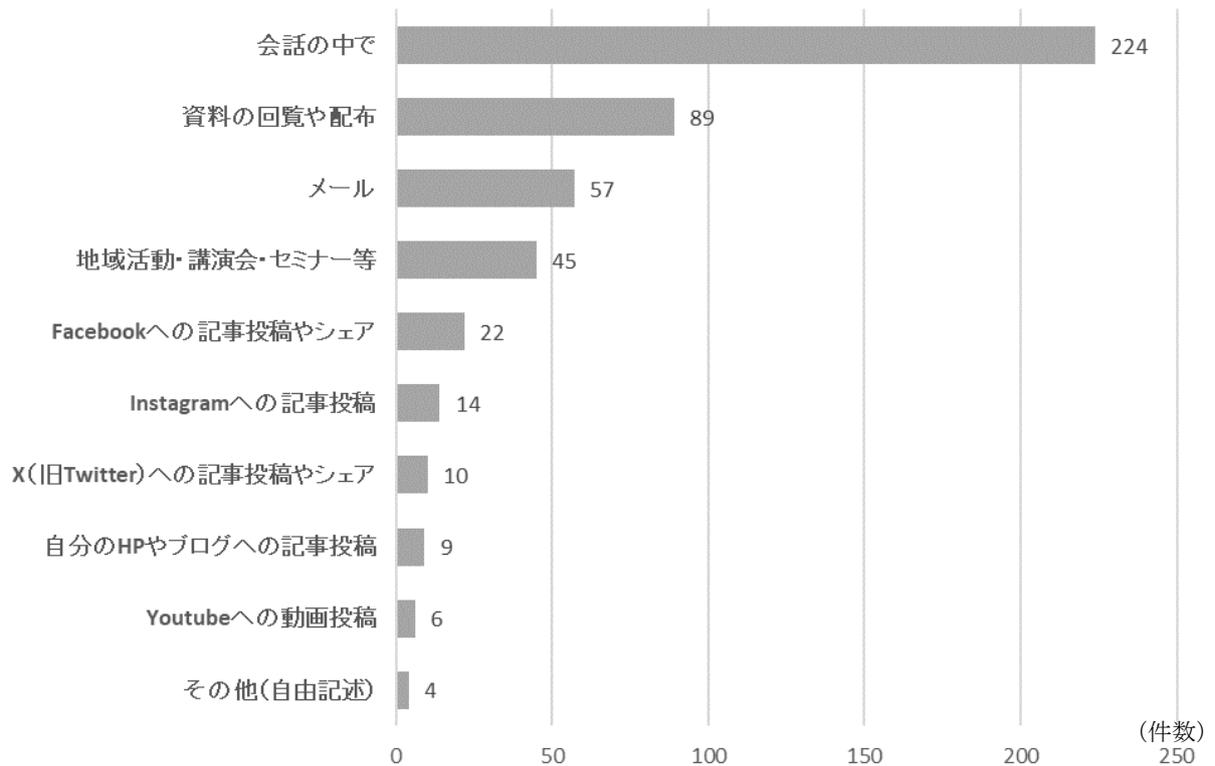


図8 PFAS の評価に関してどのように情報提供するか（複数回答）

また、PFAS の評価について周囲に情報提供したいと思わない者に理由を聞いたところ、「安全を確信できないでいるから」「評価書が難しすぎて理解できていないから」、「一般的には認知が低く、あまり話題になっていないから」「健康リスクを啓発しても、対応策が見つからないから」などが挙げられた。

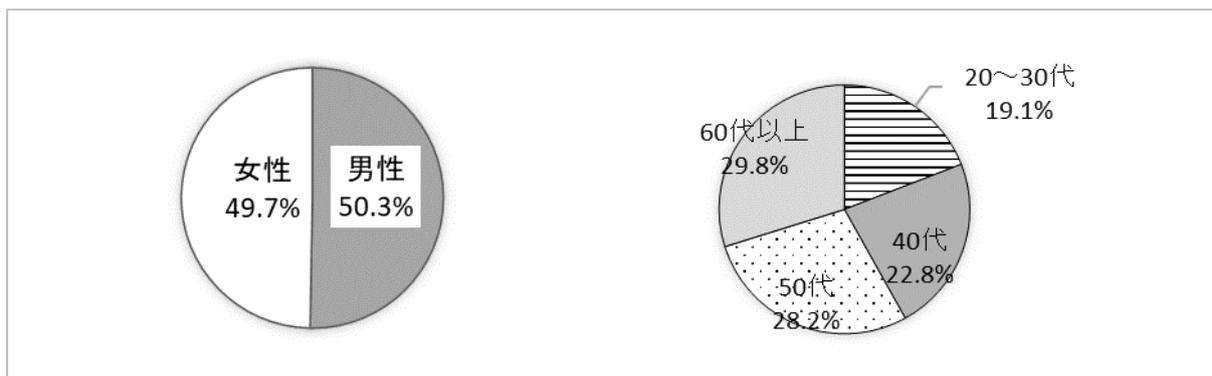
＜3＞食品安全委員会・食品安全モニター等について（自由記述・主な回答）

- (1) 食品安全委員会へのご意見・ご要望、モニターになってよかったことや、モニターになる前と後で当委員会のイメージがどのように変化したか等モニター活動全般で感じたことを聞いたところ、「知識が広がって勉強になった」、「根拠となるデータを見ながら、自分の考えをもてるようになったこと」、「eラーニングの受講ができたこと」等が挙げられた。
- (2) この一年で、印象に残った食品安全に関する話題や出来事について聞いたところ、「紅麹問題、健康食品の安全性について」、「機能性表示食品制度の問題について本格的な検討がなされ国民の関心が高まったこと」、「一般飲食店の食中毒対策の対応の低さ」、「カンピロバクターの国の取り組みが広がっていること」などが挙げられた。
- (3) 食品安全委員会に発信してほしい情報についてきいたところ、「代替肉開発での今後の課題」、「x や一部週刊誌の記事で間違った記事が出た際に、中立的な内容をタイムリーに発信できないか」、「食品安全の子ども向け資料」、「食品添加物」、「YouTube などの映像の分かりやすい資料」「子どもや高齢者にも理解しやすいチラシのような教材で公民館などで配布できるもの」などが挙げられた。

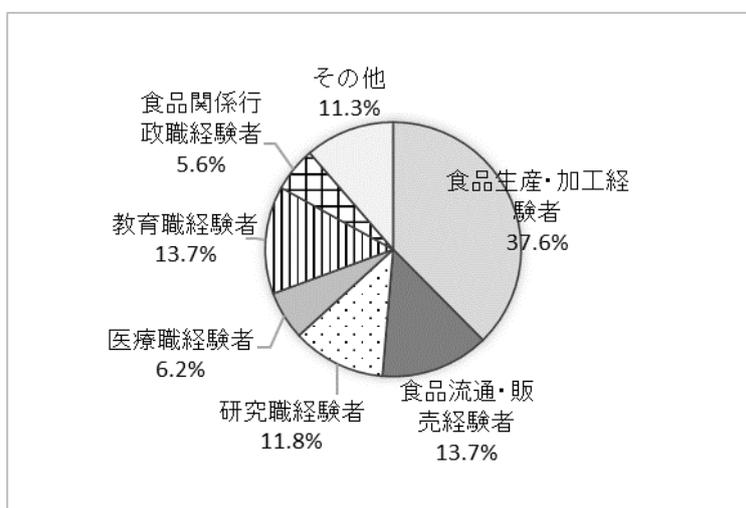
以上

調査回答者の内訳

① 性別・年代 (n=372)

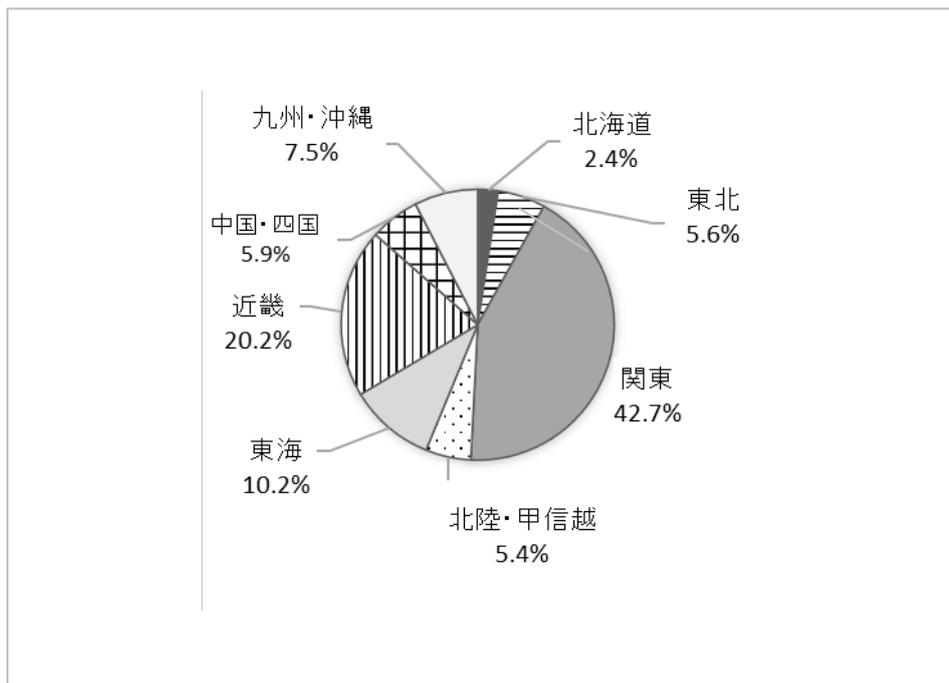


②職業経験 (n=372)



	性別		年代区分				合計
	男性	女性	20~30代	40代	50代	60代以上	
食品生産・加工経験者	89人 63.6%	51人 36.4%	21人 15.0%	31人 22.1%	44人 31.4%	44人 31.4%	140人 100.0%
食品流通・販売経験者	32人 62.7%	19人 37.3%	11人 21.6%	11人 21.6%	16人 31.4%	13人 25.5%	51人 100.0%
研究職経験者	26人 59.1%	18人 40.9%	6人 13.6%	12人 27.3%	10人 22.7%	16人 36.4%	44人 100.0%
医療職経験者	3人 13.0%	20人 87.0%	9人 39.1%	7人 30.4%	3人 13.0%	4人 17.4%	23人 100.0%
教育職経験者	14人 27.5%	37人 72.5%	6人 11.8%	11人 21.6%	20人 39.2%	14人 27.5%	51人 100.0%
食品関係行政職経験者	13人 61.9%	8人 38.1%	2人 9.5%	4人 19.0%	2人 9.5%	13人 61.9%	21人 100.0%
その他	10人 23.8%	32人 76.2%	16人 38.1%	9人 21.4%	10人 23.8%	7人 16.7%	42人 100.0%

③居住地 (n=372)



④モニター継続年数 (n=372)

